

喫茶店文芸

2021年3月号

お題

「卒業」

喫茶店文芸 2021年3月号——目次

ほろほろほろろ

代償 1

山本織

歌集 2020／8 7

天野満

かますケーション・ブレイクダウン

19

マサユキ・マサオ

人の脱糞を笑うな 23

山中隆二

行き場のない鳥 29

氷川省吾

ナイフでヒットマン 33

ほろほろほろろ 代償

HOROHORO HORORO



代償

ほろほろほろ

夢を見た。車に撥ねられる夢だ。

気付けば俺は通い慣れた通学路の一角を歩いていた。高い塀で縁取られた静かな住宅街。だが、周りの景色はすりガラス越しのようにあやふやで、遠のくほど白くぼやけていく。俺が前へ足を踏み出すと、前方のものが晴れ、背後の景色は薄れていく。踏んだ地面に波が立ち、波紋が緩く広がっていく。そんな不思議な世界に何の疑問も持たないまま、俺は学校の方へ歩いていた。

スマホで時間を確認するとまだ始業には余裕がある。たまにはのんびり行こうと、足の運びを遅らせる。

その時、ふと視界の先に人影が見えた。同じ高校の制服を着た女子だった。背丈的に、俺より一つか二つ下だろうか。その子は俺に背を向けたまま動かない。見慣れない奴だと胸の内では呟きながら、その背後を通り過ぎる。

その時だ。背後から猛々しいエンジン音が聞こえたのは。

反射的に振り返ると、黒塗りの車が猛スピードで突っ込んで来ていた。進行方向の先には例の女子。しかしその子は、車の存在に気付かないのか動くことなく突っ立ったままだ。

俺は心の中で何かを叫び、無意識に走り出した。女子を突き飛ばし、迫り来る車の前に躍り出た。全てが一瞬のことで、息する間もない。

激しい衝撃と共に体の自由を奪われ、視界が一瞬黒く塗り潰された。

撥ねられた瞬間のことは覚えていない。曖昧にぼやけた世界の中で、気付けば俺はバンパーのひしゃげた車と崩れた塀の間に挟まれ横たわっていた。

目に見える景色とは裏腹に、両足に走る感覚だけは鮮明だった。じくじくとした痛み、どくどくと流れ出る血液の熱、晒された肉を撫でる風の冷たさ。

声を上げたくて、助けてほしくて必死にもがく。だが、俺の声は誰にも届くことはなく、代わりに曖昧な世界は次第に縮小していく。痛みは少しずつ引いてゆき、俺の意識も薄れていく。最後、遠のく視界を巡らしてみるのが、助けた女子の姿はどこにも居なかった。

こうして夢は終わる。だが、一度では終わらない。何度も何度も同じ夢を繰り返して見た。同じ景色、同じ結末、同じ苦しみ。それを幾度となく経験し、俺は。

「先生！ 貴博が！ 息子が目を覚めました！」

母親の声を聞いて、俺は病院のベッドで寝かされているのだと悟った。

意識を取り戻した俺は診察を受け、医者と話し、再び個室に戻された。どうやら俺は丸二日ほど目を覚まさなかったらしい。こうして意識は取り戻したが、怪我のこともあり、相当長い期間入院することとなった。母親は家まで必要なものを取りに帰る言い、部屋を出て行った。俺はまた、一人になった。

静かな病室。ふと目を閉じると、すぐに夢の内容が思い出される。ぼやけた曖昧な景色、感じた痛みと苦しみ。その全てが幻だとしたらどれだけ良かっただろう。

だが、全ては現実だ。

通学途中、俺は車に撥ねられた。轢かれそうになった女子を突き飛ばして、俺が代わりになったのだ。思い出しただけでも、当時の痛みがぶり返すようだった。

半ば無意識に足をさする。あの時感じた痛みを取り払うように。だが今は、その痛みすら感じる事ができない。俺の両足は、膝から下を失っていた。

あるはずのものが無い。本来なら脛や足首のあった場所はすっかり空っぽだ。その事実を実感し、胃酸が込み上げるのを感じた。水を飲み下して何とか落ち着きを取り戻す。そして、長い溜息とともにベッドに背中を預けた。

「お前は立派な事をした」と、母親は何度も俺を励ました。身を挺して人の命を救った。それは人間として素晴らしいことだ、誇れることだと。

果たしてそうだろうか。

両足を失った俺は、もう二度と人と同じようには振る舞えない。日常生活でも、社会生活でも苦勞することが多くなる。

これからの生活の苦勞なんて想像に難くない。一生車椅子生活。これまで一度も自分がその立場になるなんて想像したことはなかった。これから俺は両親に沢山面倒を掛けるし、気も使わせるだろう。学校生活でも、友達や先生に気まずい思いをさせるだろう。そして何より、俺は二度と自由に駆け回ることができな

い。スポーツはおろか、気軽に町へ出ることすらままならない生活。これまで何気なくこなせていたことの多くが不可能になったのだ。

そんな絶望に満ちた未来を前にして、俺は何を誇れるのだろうか。

俺は両足と自由を引き換えに、何を得たというのか。

「し、失礼します」

その時、静かにドアが開かれた。医者でもなく、看護師でもない。か細い声の持ち主は、俺より年下の女子だった。

その子は同じ高校の制服に身を包んでいた。少しおどおどした佇まいで、その顔に見覚えは無かった。

見知らぬ女子が見舞いに来るはずもない。だから、彼女が何者か訊くまでも無かった。俺が助けたあの子だ。

彼女は果物の入った小さなバスケットを胸の前で抱きながら、入り口の前で立ち尽くす。視線を向けると、少し怯えたように肩をすくませた。

「わ、わたし、岡田梨恵っていいいます。あの、岩瀬さん、ですよ」

「……そうだけど」

「あの、えっと、先日は助けていただいて、ありがとうございます」

岡田と名乗る女子は深く頭を垂れ、そのままじっと動かない。数秒の沈黙を経て、こいつは俺の言葉を待ってるのだと気付いた。

だがこういう時、何と返したらいいのだろう。

「いいよ」なんて軽く返せるはずがない。軽い物の貸し借りをした訳ではないのだから。俺は両足を失った。一生物のハンデをお前の代わりに背負ったんだ。俺は決してそれを望んでたわけ

じゃない。俺はただ無意識に走り出したただけだ。もしこうなることが分かっていたら、俺はお前を助けなかったよ。

なあ、お前は俺に何て言ってほしい？ 赦しがほしいのか？ 怒鳴ってほしいのか？

こいつのことを考えれば考えるほど、無性に怒りが喉奥からせり上がってくるようだ。

「……それで？」

岡田は顔を上げると、きょとした表情で俺の顔を見た。

「え、えっと……」

「ここに何しに來たのかって訊いてんの」

「それは！ あ、助けていただいたお礼をと思つて」

お礼、か。その足しに果物盛り合わせを抱えてるわけか。そうか。

「それで？ お礼を言われると俺の足は元に戻るわけ？ それとも、それ食えば足が生えてくるってか？」

「い、いえ、そうではないですけど……」

「じゃあお前は何がしたいの？」

「わたしはただ、命を救っていただいたお礼がしたくて――」

「てめえの自己満足に付き合わせんじゃねえよ！」

テーブルに拳を振り下ろす。岡田は肩を跳ねさせ、バスケットから果物がこぼれ落ちた。

若干後ずさる岡田に迫るように身を乗り出し、俺は両足に掛かった布団を勢いよく剥がした。包帯巻きにされた両膝が露わになる。

「本当ならお前がこうなるはずだったんだ！ それを俺が肩代わ

りしたんだぞ！ 見ず知らずの他人の代わりにな！ それなのに何だ！ 俺は両足の代わりにお礼と果物が貰えるってか！？ ふざけんじゃねえ！」

「ご、ごめんなさい……」

込み上げる苛立ちを躊躇うことなくぶちまける。そうする権利が俺にはあるはずだ。何せ俺は、こいつのために両足を犠牲にしたんだから。失った足は決して元に戻らない。こんな俺を何人たりとも非難できやしないだろう。

「礼とやらをしたら、お前は俺のことなんか忘れてのうのと生きるだろうさ。事故のことなんか綺麗に忘れて、俺への恩も無かったことになる！ けどな、俺はこれから毎日毎日、足の不自由を自覚する度にお前を思い出す。あいつなんか助けなきゃ良かった、あいつのせいで俺の人生が壊れたと、これから何度も思うだろう。そんときに感じるやりきれなさがお前に分かるかよ！」

「い、いえ……」

「だったら独り善がりなことすんじゃねえ！ 迷惑なんだよ！ 俺を！ お前の自己満足の道具にすんじゃねえ！」

机の上のペットボトルを掴み、岡田に投げつける。岡田は怯えた声を漏らしながら、バスケットを落として自分を庇った。それが俺をより苛立たせる。

「消えろ！ 二度と来るんじゃねえ！」

「え、でも――」

「聞こえなかったのか！？ 消えろつつつたんだよ！」

「ひつ、ご、ごめんなさい！」

岡田は背を向けると、ドアを開けたまま走り去っていった。

ドアはゆっくり閉じてゆき、岡田の足音も遠のいていく。それにつられるように、俺は虚脱感に包まれていく。

ベッドに倒れ込み、白い天井を見上げる。

俺はこれからどうしたらいいだろう。

家、学校、就職。これから起こる全てに、想像できないほどの苦勞が満ちているのだろう。だがそれらに對して、この足を言い訳にすることはできない。人の命を救ったとしても、それだけで学校を卒業することはできないし、仕事が免除されるわけでもないし、一生分の生活費を貰えるわけでもない。人命を救ったという名譽は薄っぺらく無味乾燥で、他人にとつて無価値でしかないのだと、今ならわかる。それに対し、俺が失ったものは大きすぎた。

……俺は、これからどうしたら。

いつそのこと死んだ方がまだ幸せだったのかもしれない。人の為に命を投げうって、そして死ぬ。そうしたら俺は今のようになぜか感情を一切抱くことはなく、世間では英雄譚の一つとして語られるだろう。ああ、そのほうが絶対に良かった。

どうして俺は死ねなかったのかな。

ふとした考えを咀嚼しながら、俺を目を閉じた。

山本
織
歌集

2020/8

YAMAMOTO SHIKI



愛されるために生まれたはずだろう

やわらかな棘を 持ったサボテン

ホームセンターへ行くと、つい観葉植物のコーナーを覗いてしまう。グリーンの持つ癒やし効果は絶大だ。自室でいくつか植物を育てているが、霧吹きで水をやるとつやつやと輝く葉は美しく、小さな芽は実に愛らしい。ただ、日当たりや温度、湿度など、気をつけなければならぬことがたくさんあり、ずぼらな私にとっては、育てるのがなかなか難しくもある。

それまで生き生きとしていたのに、何が原因かも分からないまま突然枯れてしまうこともある。育てている植物の中だと、最近コーヒーの木が、この冬の寒さにやられたのか禿げ散らかしてしまった。背丈は五十センチほどまで伸びたのだが、葉がボロボロと落ちてしまい、現在はてっぺんの二枚しか残っていない（ので、「海平」と呼んでいる）。しかし、幹はまだ枯れておらず、新芽も出てきているので、春、暖かくなったころ、また元気になることを願っている。

不死鳥よきみにも消えなくなる夜があるだろう

空は今日も燃えている

真っ赤な夕日って不気味だ。ぐらぐらと燃えるように赤く染まった空は、きれいである以上に、どこか恐ろしい。きつと、炎や血を連想させるからだろう。そういえば昔、異常なほど赤い夕焼けは地震の前兆だなんて聞いたけれど、あれは本当なのだろうか。

空が好きで、よく見上げてしまう。ただぼんやりと眺めていて飽きないし疲れないなんてものは、空と海くらいではないだろうか。もう少し世代が若ければ、きつと私はSNSに空の写真を投稿しているだろう。「#今日の空」を付けて。もしかしたら、そこにポエムを添えるという、「ヤバイ」に「ヤバイ」を重ねたミルフィーユを作ってしまう可能性もある。高校時代にツイッターやインスタグラムがなくて本当に良かった。

窓のない病室の壁の窓の絵に掛けられている

レースカーテン

「本当の優しさ」とは何か。定義はきっと人それぞれだろう。私は、「本当の優しさ」とは「見返りを求めない思いやり」「無償の愛」であると思う。それは、美しく、清らかで、まぶしい。

この歌はそのような、私の思う「本当の優しさ」を詠んだものだ。壁に飾られている窓の絵は、あくまでも絵である。窓枠を模した額縁を外せば、現れるのは真っ白な壁なのだ。しかし、その絵に誰かがレースカーテンを掛ける。窓にはカーテンが必要でしょう、と微笑みながら。

風の吹かない部屋で、レースカーテンは揺れることも膨らむこともなく、そこにある。当たり前のように、ひどく自然に、ただ静かにそこにある。「本当の優しさ」とは、つまりそういうものだと思うのだ。そしてそれは、私が憧れてやまないものでもある。いつか、「本当の優しさ」を持った人になりたい。

猫を抱く

同じ鼓動では生きられぬ

僕らいまは等しく温か

犬を飼っている。本当に可愛い。なんでこんなに可愛いのかよ、と思わず歌ってしまうくらいに可愛い。もしも大泉逸郎に生まれ変わったら、デビューシングルは「犬」にしよう。ヒット間違いなしだ。犬がどうしてこれほどまで可愛いのか、調べてみると、どうやら「犬は狼のネテオニー（幼形成熟…幼い頃の性質を色濃く残したまま成長する状態）である」との学説があるらしい。確かに、犬のあの純粹な目や、無邪気に遊ぶ姿は、幼い子ども特有の愛くるしさである。それを生涯持ち続けるなんて、可愛くないわけがないのだ。

ここまで犬の話をしてきたが、歌の中では猫を抱いている。「いや猫なんかいい！」と、イマジナリー相方にツッコまれたので一応説明すると、うちの犬は室内飼いではないため、「抱く」という行為には猫のほうがつくりくるのである。そして大事なことだが、猫も犬と同じくらい可愛い。ちなみに「ヒトはサルの子ネテオニー」という学説も存在するらしい。だが、それにしても人間が可愛くなさすぎるので、私としてはあまりしっくりきていない。それに、人間の目は年を取るほどに濁っていくではないか。

公園で鳥賊焼きを喰う

本当に愛は地球を救うのですか

「愛は地球を救う」をキャッチフレーズとする某番組が好きになれない。チャリティー番組自体はいと思う。様々なメディアが登場する中でも、まだまだテレビの力は大きい。しかし、観ていて感動を強要されているような感覚になること、マイノリティがそのための「コンテンツ」にされてしまっているように思えることから、なんとなく苦手意識を抱いてしまうのだ。

「愛は地球を救う」という言葉自体は嫌いではない。しかし、地球を救うよりもまず、自分が救われたいと思う瞬間がある。

その日はいつになく酔っていた。なんとか終電に滑り込み、最寄り駅までたどり着いたものの、ぐるぐると回る視界の中、このまま帰宅するのは不味いと思った。少しでも酔いを醒まそうと、自販機で缶コーヒーを買って、公園のベンチに座った。しかし、プルタブを開けた缶コーヒーは、傾けた瞬間に完璧な流れで手から離れ、服に不思議な地図を描きながら地面へと落下した。何のリアクションも取れないまま、地面に吸い込まれていくコーヒーを眺めた。図らずも、地球にコーヒーを奢ってしまった。

誰か私を救ってくれと、叫びたい気分だった。

それは、情けない、最悪な夜だった。だからこそ、どうしようもなく愛おしい夜だった。そういう一瞬を、私は歌にしていきたい。

天野満

かますケーション・ブレイクダウン

MITSURU AMANO



かますケーション・ブレイクダウン

天野満

コミュニケーション能力不足が俺の人生を脅かしている。

「コミュ力不足」についての懸念は、幼少の頃に俺の中に芽生え、人と接する機会が増えた大学時代に顕在化し、寝ても覚めても俺を苦しめるようになった。

もちろん、俺とて、ただただ手をこまねいていたわけではない。場数を踏めば改善されるのでは、と接客のアルバイトを始め、学を積みめばよろしいのでは、と「コミュニケーション能力」に関する書物を読み漁り、ナンパしたらコミュ力上がるんじゃないか、と知り合いにアドバイスを受けては、盛り場でのナンパの真似事を始めた。結果、どうなったか。

どうにもならなかったのである。

それはおろか、日に日にコミュニケーション能力が劣化していったのである。仕事上の連絡事項さえ相手にロクに伝えられずにバイト先ではアホ扱い、学習用の書籍代がかさんで文無し、ナンパしてやっと話してくれた相手からはねずみ講商法に勧誘されるといった有様であった。

万策尽きた俺は自宅で灰になっていた。それはまさに消し炭だった。雪より白く、アメンボのように無力だった。

一筋の涙が頬を伝い、やがてそれは泉になり、川になって、冷たい海へと続いていった。

水平線の向こう側で手を振っているのは人魚たち？ おーい、僕はここだよ。ってあれ、トランペットじゃね？ いつの間にか

ドーナツ屋出来てるやん。

確定申告は行く！

え、何、キャベツ？ 鉛筆削り貸してよ！

わあああああああ、と叫びながら、俺は目覚めた。全身が寝汗でビショビショになっていた。いつの間に眠っていたらしいが、最悪の夢だった。

そもそも「コミュニケーション能力」という言葉がよくないのだ。コミュニケーション、と聞いただけで心が委縮し、結果として行動までが委縮してしまっているに違いない。シャワーで身体を禿つ、俺は確信した。

このままでは、定職にも就けず、貧乏になるだろう。金を無心するものだから、家族と友人からは絶縁され、孤独な生活を送ることになる。そのうち、世間を逆恨んで、凶悪犯罪を起こしてしまいかねない。

そこで、俺は自分の意思疎通能力を「かますケーション」と名付けることにした。「コミュニケーション・スキル」という横文字と違って「かます」という言葉には親しみやすさと剽軽さがあるからだ。

名前を変えただけでは何も変わらない、と言いたくなる人もあるだろう。しかし、名前の効力を侮っては行けない。例えば、ビジネスの世界では商品名を買えただけで、売上が何倍にもなった、という例がいくつもある。

「かますケーション」は人生に光をもたらしてくれる、と俺は信じているのだ。

「かゝらゝのゝ？」

俺の主張を聞いたチャライ大学二回生が、ヘラヘラ笑いながら言いよるのである。カシスオレンジの入ったグラスを片手に持ちたるうえ、だらしなく椅子に腰かけて。

よからう、では「俺はいかにコミュニケーション能力が無いか」をお前に伝えてやる。それも「かますケーション」の力を使用してだ。単に名前を変えただけの意思疎通でないことを証明してやる。

例えば、お前が俺と二人、定食屋で食事をしていたとしよう。

お前は「魚のお刺身定食」を頼んだ。料理が運ばれて来るや否や、お前は空腹のあまり血走った眼で俺に言うのだ。

「おいっ。そこに置いてあるお醤油をよこしやがれ」

しかし、困ったことに、お醤油の瓶は中身が空っぽだったのである。

ここで、コミュニケーション能力のある人ならば「あ、お醤油の瓶、中身空っぽやわ。店員さんに言うて持ってきてもらうな」と事情を説明したりするだろう。

あるいは「偉そうに言うんじゃねえ。丁寧な言葉でお願いしやがれ」と、事情の説明に加えて無礼を諫める、など高等なレスポンスをする人もいるかもしれない。

では、俺ならばどうするのか。パターンは二つある。

○パターンその一 「筆者の気持ちを考える」

「あ、お醤油入ってないわ。君はお刺身を塩味なしで食べなくてはいけないんだ。可哀想にね」と答える。貴様は烈火のごとく怒り狂って、俺の両耳に箸を突き刺すだろう。

俺は思ったのだ。相手の気持ちに寄り添ってあげることこそが、人生において一番大切なことなのだ。だから、俺はお前の気持ちに寄り添うべく、塩味のついてないお刺身を食べる悲しみを想像し、可哀想だね、と言ったのだ。

小学校のときの国語の授業で、筆者の気持ちを考える行為をやっただろう。あれと同じだ。お前は「お前の人生」という物語の筆者で、俺は筆者であるお前の気持ちを考えた。けど、お前は俺の発言の意図を考えることもなく、暴力を振るって、思いを踏みにじったのだ。猛省したまえよ――。

○パターンその二 「代案を提案する」

「あああああ、大変っ、瓶の中には、お醤油が入ってないわ。代わりにバスケットボールならあるんやけどなあ……。それかモンキーレンチなんかもあるで！」

お前は奇声をあげながら、俺の頭をつかんで、テーブルに何度も叩きつけるだろう。ピクリとも動かなくなるまで。

お前が反省してくれたら俺は嬉しい。だから、俺の意図を教えあげるね。殺人罪で刑務所に入ったあとにでも、じっくり考えてくれ。

俺はお前に対して、すっげえ申し訳ない、と思ったのである。だからこそ、お前に代案を提示して納得してもらおう必要があると考えたのだ。円形脱毛になるほどに。

でも、俺の頭は「申し訳なさ」で満ち溢れて、店員さんに「お醤油」のありかを聞くことが頭からすっぽ抜けていたんだよ。よって、近くにたまたま置いてあった、バスケットボールやモンキーレンチを提案したわけだ。なお、それらの物品がなぜ定食屋に置いてあるかは考えないものとする。ははは。俺の心は点P、線分ABの上を時速八十キロで移動している――。

どうだ、俺のコミュニケーション能力の無さが伝わっただろう！

何、意味が分からんだと？

実はお前がそう思った時点で俺の作戦は成功している。

もし、先ほどのまでのプレゼンの意味が伝われば、それはそれで成功だ。俺がいかにコミュニケーション能力がないかをお前が理解した、ということだから。しかし、意味が伝わってなくても、成功なのだ。意味不明のプレゼンだ、とお前が思った時点で、俺にコミュニケーション能力がない、ということはお前に伝わっているのだ。

これが「かますケーション」だ。伝わらなくても伝わる、唯一の方法。俺の知略の鮮やかさには、かの諸葛孔明もビックリ！

いや、違う。諸葛孔明がビックリしているのは、俺の愚かさ加減のほうだよ。

よく考えたら、かますケーションは「自分の愚かさの説明」以外には全く使用できないのである。しかも、結局、言葉で伝えているのだから斬新性のカケラもない。まさに名前を変えただけ

だったのだ。すまん。

「連環の計」と称して、自分を愚かさの鎖で縛り付け、自虐の火矢で己の身を焼いているだけ。その拙劣な行いを「かますケーション」と名付けて、一人ニヤニヤしている。自ら進んで破滅の道をゆく者を阿呆と呼ばずして、何と呼ぶのか。

「あなたに足らんののは、コミュニケーション能力でなく、知恵でないのでか？」と、孔明のやつは、ご自慢の羽毛扇で顔を隠してほくそ笑んでいるに違いない。

やつの予言通りに吹き出した東南からの風が、自虐の炎を煽りたてる。

「謀ったな孔明！」俺は火だるまになりながら叫んだが、もちろん孔明は何も悪くないのである。(了)

マサユキ・マサオ

人の脱糞を笑うな

MASAYUKI MASAO



人の脱糞を笑うな

マサユキ・マサオ

それは社会人一年目の春のことです。

輝かしい夢も希望も二週間程で挫折した私は、社会に絶望し、かといってすべてを投げ出す勇氣もなく、干からびた魚の目をして日々仕事に勤しんでいました。

そんなある日のこと、無意味な営業をサボって車内で居眠りをしていた私は、どうしようもない便意を感じて車を飛び出し、つつい近い近くの草むらで野糞をしてしまったのです。

私は十分に周囲を確認したはずでした。しかし、寄りにもよって尻を丸出しにして踏ん張っている真つ最中、背後から声をかけられたのです。

「うわっ、この人うんこしてるーっ！」

それは、どぎつい化粧をした女子高生でした。女子高生は甲高い声で「うんこしてるーっ」を連呼して、踏ん張っている私をスマホで撮影し始めました。私は急いで立ち上がり、ズボンを上げようとなりました。しかし、あまりにも急の出来事に、焦った私は腰を抜かしてしまいました。そして 無情にも私の尻からはうんこがひり出し続けられていました。

女子高生の奇声に吸い寄せられるように、下校時の小学生や買い物婦りの主婦たちが集まってきました。

「うわぁ、お兄さん、うんこしてるの？」

「あらやだ、うんこよ、しかもとても長いわ！」

「うんこしてるーっ、うんこしてるーっ」

「うふふふ」

「ぎゃははっ！」

彼らは私を取り囲み、ゲラゲラと笑い出しました。

私は涙に伏せりながら這いつくばって車に戻りました。振り返ると、女子高生はいまだに、うんこ、うんこと叫びながら、ピースサインをする小学生とうんこを一緒に撮影していました。

私は一晩悩んだ末に、もう死ぬしかないと思いました。それもこれも、すべては私のうんこのせいです。いえ違います。それ以上に、人間の自然な行為である脱糞がこれほどまでの失笑と冷遇を受ける不条理に私は絶望したのです。

私は首を吊る為のロープを買いに、近所のホームセンターに行きました。そこでロープを吟味する私の耳に、こんなひそひそ話が聞こえてきたのです。

「ほら、あの人！昨日草むらで野糞してたっけいう」

「もう学区の人、全員知ってるそうよ」

「そんな人がロープを買いにきてるってことは……」

「死ぬ気よ！ 首を吊るんだわっ！」

「原因はやっぱり、うんこかしら？」

「うふふふ」

「ひーっ、ひゃっはっはっ！」

中年女性たちの声は、遂に笑いの連を生み、ホームセンター中の買い物客がゲラゲラと笑い出しました。私はいたたまれなくなり、売り場にあった出刃包丁で中年女性の脇腹をグッサリ貫きました。

殺人を犯した私は、後日法廷で罪を裁かれることになりました。

しかし、ふと横を見ると私の弁護士は居眠りをしているではないですか。

「弁護士、弁護士！」

裁判長の言葉に、クワツと机から飛び起きた私の弁護士は我に返り、折りたたんだくしゃくしゃの紙をポケットから取り出しました。

「被告人は、ええつと、この度の被害者たる主婦Aさんから名誉棄損の、行為を受け、えーっ、深く傷つき、今回の凶行に至ったわけですが、ええつと」

「その件について参考人、証言台に登壇ください」

私は参考人を見て、思わずアツと叫びそうになりました。それは、私のうんこを撮影していた女子高生だったのです。

「この人はきつと、被害妄想をこじらせてしまったのです。とても惨めで可哀そうな人なんです。本当に、本当に可哀そう」

私は思わず彼女にとびかろうとしました。しかし、勿論のこと、ガードマン達が先に私を押さえ込みました。猿ぐつわをはめられた私は、必死に目を見開いて裁判長に懇願しました。

いつの間にかやら、這いつくばる私の横には検察官が立っていました。そして彼は高らかに宣言しました。

「見て下さい、彼の目をつ！ 紛れもない狂人の目です。更生の余地などありません。死刑、死刑を要求します！」

裁判はあつという間に終わりました。死刑判決でした。

私はあまりのショックに気を失いました。

目覚めてから私が状況を理解するまで、一時を要しました。どうやら私は独房に居るようでした。そして、何故だか腕には点滴の注射針が刺さっていました。起き上がろうとしても中々起き上がる事が出来ません。看守がやってきて、今日が何年の何月か分かるか、と聞いてきました。私が黙っていると、看守が日付を教えてくれました。裁判から丁度五年の歳月が経っていました。私は、ひたすら昏睡していたのです。

それが数ヶ月、私はリハビリに勤しみました。動かなかった手足が少しずつ動くようになり、私は汗をかき苦勞しながらも満足感を得ました。今までのすっかり忘れてしまっていたのです。地道な積み重ねや努力の大切さを、私は改めて噛みしめました。

そうして、以前のように食事をとることも出来るようになったある日、看守が私に食べたいものを聞いてきたので、かつ丼が食べたい、と答えました。私が食べ終わると、手錠を嵌められ、どこかへ連れていかれました。

そこには両親、姉、弟、甥っ子まで来ていました。そして、どこかで見たことがあるような女がその中に混じっていました。私有何か言いたげにしているのを察して、弟が口を開きました。

「兄さん、兄さんには確かに失望したけれど、感謝もしているんだよ。だって僕はあの裁判で彼女と出会うことが出来たのだから。紹介するよ、僕の妻です」

女はしおらしげに、ぺこりと頭を下げました。

私は、薄ぼんやりとした記憶を辿っていくうちに愕然としました。そう、女は私のうんこを笑った、あの女子高生だったのです。

見ると、彼女は妊娠している様子でした。

私はどう返して良いか分からなかったのとおりあえず、おめでとう、と言いました。ずっと黙っていた父が私に、最期に何か言が残すことはないか、と尋ねてきました。

不意に私は状況を把握しました。

だって、まさか今日が死刑の執行日とは露とも知らなかったのですから。私は看守に聞いただしました。看守は挙動不審になって、目をきよろきよろさせて答えました。

「まあ、いつ伝えるかとか決まりは無いんでね」

そんな訳あるか、と思いつつ、彼にはかつ井を用意してくれた恩もあるので、黙って大人しくしていました。黙っているのを良いことに彼は陽気に語り始めました。死刑囚を連れて行くのは今日が初めてなのだ、とえらく高揚しながら言いました。

私はついに死刑台へと連れていかれました。甥っ子が、僕も一緒に行く、と駄々をこねたので、君にはまだ早いよ、と言って頭を撫でました。姉は薄気味悪そうな顔をして、息子を私から引きはがしました。

私は、今から死にゆく自分という存在について考えました。今まで私は、私がこのようになってしまった要因を社会に擦り付けてきましたが、どうも違うのではないか、と思い始めていました。野糞を見られなければ、仮に醜態を晒しても死のうとしなければ、嘲り笑われても大人しく家に帰っていれば、こんなことにはならなかった筈です。

私は、初めて被害者のおばさんに謝りたい気持ちになっていました。すべては私が悪かったのです。私は死んで当然なのです。

そう思うと、何故か胸の奥がスツと晴れた気がしました。

私は執行台に連れていかれ、首に縄をかけられました。その時、私は急にトイレに行きたくなったのです。そんなことおかまいなしに執行官は私に聞いてきます。

「何か言い残すことは？」

「あの、一旦戻ってトイレに行かせてくれませんか？」

「いや、時間が。ちよつと無理ですな」

「最期ですよ、私死ぬんですよ、行かせて下さい！」

数秒の沈黙の後、涙ぐみながら執行官は言いました。

「むっ、無理っ！」

「えっ、何で泣いてるのあなた、別にトイレくらい……」

「もう嫌だ、なんで、なんで僕がこんなことっ！」

執行官は顔を真っ赤にして、部屋を飛び出していきました。そして、壁越しに彼が叫んだのを私は耳にしました。

「執行、始めえっ！」

その瞬間、私の足元の床が抜け落ち、伸びきったロープが私の首を締め付けました。薄れゆく意識の中で、姉と甥っ子の声が聞こえてきました。

「駄目よっ、たっくんっ、見ちゃ駄目っ！」

「うわあ、お兄ちゃん、漏らしてるー、うんこ、うんこー！」

何故か、執行室に甥っ子が入ってきてしまったようです。そして恐らく、今私を上から見下ろしているのでしょう。私は脱糞していました。ズボンの隙間から、ぼとぼと垂れ落ちていくのを感じました。私は、苦しい上に、どうしようもない後悔にかられました。

「臭うわっ、うんこよっ！」

弟の妻の、嬉々とした声が聞こえました。甥っ子はひたすらに、うんこ、うんこ、と連呼していました次第にそれが周りに波及し、クスクスと笑い声が聞こえてきました。

「ああっ、あなたっ、産まれそうよっ！」

「そ、そうなのかつ。それは、うんこではなく赤ん坊の方か！」

「うふふ、勿論よ」

「ふふふ」

「ひゃっははは」

「はあはあ……名前は、名前はどする？」

「うふふ、運子にしましょう」

「ふああ！ 父さん、母さん、家族が増えるよ！」

「そいつはめでたいっ！ 母さん、早く家に帰って赤飯を炊くんだ」

「赤飯ね、分かったわ、うふふふっ」

「ひーっひっひー」

「うんこ、うんこ！」

「うわあっ、はっはっはっ！」

「ひゃあっ！ はあはあはあ」

その日、処刑場にはいつまでも笑いが絶えることはありませんでした。私は、いつの間にか肉体を離れ、彼らの頭上をゆっくりと巡回して、その光景を眺めていました。魂が消えゆく最期、私は彼らのみならず、全人類に向けて捨て台詞の様に叫びました。

山中隆二 行き場のない鳥

YAMANAKA RYUJI



三月一日のは僕の通う県立船出高校の卒業式だ。ついにこの日が来てしまったかと思う。できれば来てほしくなかった。これまで小中高とトコロテン式に進学してきた。ついに自由になる。自由になるの嬉しいが、今は自由になりたくなかった。ようは大学に合格できなかっただけだ。

受験したのは別に有名私立や国公立でもない。どこにでもある中堅私立だ。勉強をサボったつもりはない。運悪く合格できなかった。浪人生になりたくないし、浪人しても大学に受かる気がしない。かといってフリーターになるつもりもない。

卒業式の後、自然と仲の良かった河北マサシと一緒にになった。硬いつぼみの桜並木を進む。

このままいけばあと五分程度で別れる。まだまだ話したりないと思っているとがたくさんある。ちょうど堤防に降りられる階段があったのでそこに並んで座る。「よお、お前はこれからどうするんだ。マサ。俺は浪人して遊明大学法学部を受験するよ」「そうなんだ。どうしても遊明大学法学部に行きたいだ昔から警察になって弱い人を守りたい言ってたもんな」

マサを見ると少しうかない顔をしていた。しまったと思った。彼とは長年の友人だが彼のことを知り知らない。知っているのは正義感が強く、真面目で、それでいて冗談をよく言ってみんなを笑せている奴だということくらいだ。確かに好きなゲームや好みについてはなんとなく分かるが、たマサのプライベートについて

はあまり知らない。今、思い出してみると家で遊ぶときはいつも僕の家で遊んでいた。別にマサの家に行く用事がなかった。だからこれまで行ったことがなかった。そのことを気にしたことがなかった。

「いいよなマサはやりたいことが決まっていって。まだ、これから何を学びたいかやりたいかが決まっていんだ。でも、こうやって並んでいると高校を卒業したって実感がわかない。普通に明日も学校いけば自分の席があつてクラスメイトのみんなも、先生が来て変わらずに授業を受けられ気がするよ」「そうだな。できれば、卒業したくなかったよ、合格の通知を受けるまではね」

ハハッと僕は笑うがちつとも楽しくない。

浪人生として一年間勉強漬けか。一年間勉強机に向かい続けるのイヤだなあ。遊んでいたいよ。でも、やるしかないよな自分の夢の実現のためな」バシンと頬を叩いて気合を入れている。マサの夢のために真っ直ぐになれるところが羨ましい。自分は捻くれていてすぐに目の前の不合格という事実から目を背けている。これから何をすることも決めていない。

僕からしてみたらどうしても遊明大学法学部に行くっていう思いがあるのはすごいよ。学びたいとないから一番の得意科目が日本史と国語が好きな科目だから国文学部日本文化学科を受験した。それでいて受験に失敗したときた。笑いのだよ」自嘲的にいって悲しくなる。「他にも浪人している人もいるから。自分を卑下することはないよ」

「それって、国公立や難関私立の話だろ。僕みたいな地方中堅私立じゃないだろう。それに今更、人してまで大学に行くうなんて

思わない。でも働きたくもないんだ。ダメだよな」

いきなりマサが立ち上がって階段を下っていく。「オレさ。今まで誰にも話してこなかったけど。親父を小学生の頃に亡くしてるんだ。気がついていたかもしれないけど、ウチに人を呼ばないようにしていたんだ」

マサのこの発言に驚かなかったわけではない。ただ、親友だと思っていたマサが何も言ってくれなかったことが悲しい。

「分かったよ。マサ、お前が僕を家に呼ばないようにしていたことに気付いていないとでも思っていたのか」

マサは目を見開いて驚いたような顔をしている。僕のことを見くびらないでほしい。

バレてたかとテヘッと舌を出して笑っているので気持ち悪いといってパンチする。

「何すんだよ。リョー、痛えじゃねえか」

大袈裟に言うが騙されてはいけない。これは演技だ。このような演技にずっと騙されてきた。彼に父がいらないことを知ったのはホンの偶然だった。

「確か、殉職したんだっけ」と慎重に口を開く。

「話してないけど知ってたんだ」

「ああ、この町にずっと住んでるなら噂ぐらいは聞いているよ」

「なら、警察になりたい理由は分かるだろう」

「多分、分かる。父の姿を探してるんだろ。お前が五歳のとき銀行で立て籠もり事件があって、一人の警察官が殉職した。だから、警察になって父の思いを知りたいそんなところだろう。だから有名大学法学部にこだわってるだろう。あそこは公務員試験に

強いつて聞くから」

「ああ、そうだ。お前はカウンセラーに向いてるよ。だって誰にも言っていないこと、隠していること

に気付いても聞いたりしないんだから」

立ち上がってそれぞれの家に向かって歩き始める。

(了)

氷川省吾 ナイフでヒットマン

HIKAWA SEIGO



郊外から都市部へ向かう朝の列車は混んでいる。1平方mあたり、最低でも4人は詰め込まれているだろう。肌寒くなっている季節なので、誰もが通勤用のスーツの上にコートを着込んでいる。茶色、紺色、黒に白。上に乗っている顔の性別や年齢は様々でも、誰もが記号のように無個性に感じられる。

その中で、誰も私の存在に意識を止める者はいない。身長160cm程度で、明るい色の髪を肩までの長さにした、20代終わりごろから30代初めの女。特に特徴のない顔立ちにワイヤーフレームの眼鏡をかけ、着ている黒のコートも普通の適当な品。まるで量販店で纏め売りされている靴下のような人間だった。

私は視線を宙にさまよわせているように見せつつ、視界の端で一人の人間を追っていた。コートの海に隠れるようにしてたたずむ40ばかりの男。背は高く痩せており、着ているシープスキンのコートがだぶついて見える。頬骨の突き出た顔はかなりやつれ、頭髮が寂しくなっているせいで一層貧相に見えた。憔悴するのも当然だろう。自分に命の危機が迫っていることを知って、ここ何日かは常に移動を繰り返して逃げ回っている。

だが、そんなことに意味はない。自宅だろうが路上だろうが、たとえ満員電車の中であろうが、運命が訪れるのは避けられない。次の駅のアナウンスが聞こえると、私はコートの袖に右手を入れ、左腕の前腕にストラップで留めたナイフの柄を握った。片刃で刃渡りは15cm。刀身は峰の部分が分厚く、刃先が角ばった形

状をしている。使うたびに買い替えるのだが、このデザインは気に入っている。いつも同じようなものを選んで入る。

人殺しに適しているから。

私は袖に隠したナイフを持ったまま、標的の方に一步近づいた。距離は20cmもない。わずかに待つと、列車が減速して停止した。降りるために乗客が席を立ち、戸口の方に足を進めようとして、人の群れに動きが生じる。到着を告げるアナウンスが鳴った瞬間、私はナイフを引き抜いた。

腕だけの最小限の動作で、ナイフを標的の左腰少し上――左の腎臓に突き刺す。鋭角に研がれた刀身は、驚くほどたやすく服と肉を突き破って体内に侵入した。ナイフをねじって傷口を広げ、もう一度突き刺してねじる。

臓器に穴が空く事態に遭いながら、標的の反応は鈍かった。いきなりナイフで刺されても、たいていの人間は自分の身に何が起きたのか、すぐに分かることはない。衝撃や熱さを感じるだけで、理解が及ぶのは吹き出る血や体に突き立っているナイフを見た時からだ。それは何度もやってきた経験則からよく知っている。彼らが事態に気付くには頃、もう手遅れにしておくのが鉄則だった。自分の体に何かが起きたことを察した標的が振り向こうとしたが、私は左手で背中を押さえてその動きを制し、続けて右側の腎臓も刺した。同じようにねじって傷口を広げてから素早く引き抜き、一動作で袖の鞆の中に隠す。

返り血は間違いない飛んだだろうが、黒のコートを着ているのでほとんど目立たない。それでも大量の血が付けば分かってしまう。吹き出る血液を避けるため、私は外に出る乗客の波に乗って

標的からすぐに距離を開ける。電車から出るとき、視界の端で標的が床に崩れ落ちていくのが見えた。

電車を出た私は後ろを振り返らずにホームを歩き、改札から駅を出た。地下駐車場に入り、あらかじめ監視カメラの目が届かない位置に停めてあった車に向かう。

トランクを開けて返り血の付いたコートを脱ぎ、大きなビニール袋に突っ込む。手首のナイフも鞆ごと外して用意していた紙袋に隠し、テープでぐるぐる巻きにして開かないようにした。靴と手袋も同じように脱いで、仕上げにウィッグも外す。私の本来の髪は黒のショートだ。

それらも同じようにビニール袋に放り込んで袋ごとスーツケース内に隠し、替えのコートと靴を身に着けると、現場から離れる準備が出来た。ねぐらに帰ってこのコートと手袋、靴、ナイフを処分すれば、仕事が完了する。

標的の生死を確認する必要はなかった。あの男がもうすでに絶命していることは確実だ。これまで何度と同じことをやってきたのだから、あの部位を刺された人間が死ぬまでにどのぐらいかかるかはよく知っている。十数秒もかからず意識は失われ、1分前後で失血死する。

仕事を行った場所から十分な距離を取って、車は予定していた場所で乗り捨てた。この車はレンタカーで、人を雇って返しに行かせる手はずが整っている。雇われた方は私と直接会ったことはなく、電話をして要求を伝え、現金を指定の場所に置いておく手続きだけでやり取りする。向こうも「余計なことを知らない」で済ませる便利屋のようなもので、その手のことは心得ていた。

色々と言め込んだビニール袋入りのスーツケースをトランクから引っぱり出し、しばらく歩いた先に止めてあった自分の車に乗せ変えて、ようやく私はねぐらへと帰っていった。

「ブルータス、お前もか」

ローマの政治家で軍人のガイウス・ユリウス・カエサルが、紀元前44年に暗殺された時に口にしたとされる言葉だ。カエサルはこの日、腹心の一人であったマルクス・ユニウス・ブルータスを含む数名に、ナイフで刺し殺された。23カ所も刺されていたが、致命傷になったのは2つ目の刺し傷だったらしい。私から見れば素人臭い下手くそさが丸出しだが、慣れない人間がやればそんなものだろう。

先のセリフを本当に言ったのか、刺された回数が本当に23回なのかまでは知らないが、少なくともカエサルがブルータスたちにナイフでめつた刺しにされて殺されたのは事実だろう。カエサルに限らず、ナイフで暗殺された者は多い。それこそ数えきれないほどにいる。

ナイフは生活必需品だ。地域や時代によって材質が異なる場合があるが、ナイフを持たない文明は存在しない。だから、どこでも手に入る。凶器の調達には苦勞しない。

扱うのも簡単だ。手に持って腹のあたりをめがけて思い切り突き出せばいいだけだ。十分な長さで鋭さがあれば、刃は筋肉と腹膜のむろい防御を突き破り、内臓や血管をたやすく損傷させる。刺した後には刃を捻じって、傷口を広げればなお良い。

肝臓や腎臓がえぐられれば、止めようがないほど激しい出血に

見舞われる。腸が破ければ、お世辞にもきれいと言い難い。『中身』が、無菌状態であるべき腹腔に漏れ出す。そうなれば1日と持たずに重度の腹膜炎に陥る。病院に担ぎ込まれても生き残れる確率は低く、大抵はショック死する。

腹にたつぷりと腹筋が脂肪が付いていても、突き出す先を喉に変えれば同じ結果が得られる。気管と頸動脈が突き破られれば、誰であつても命がなくなる。

どこでも簡単に手に入り、使い方は油断している相手に近づいて突き出すだけ。誰かに死んでもらいたい場合は、とっても簡単で手軽な方法です。殺しの道具としてナイフをマーケティングする場合、謳い文句はカエサルの時代どころか新石器時代から変わっていないに違いない。

ねぐらに帰った私は、いつも通りの後始末に取り掛かった。返り血が付いたコートと手袋はバラバラに切り刻む。それから小型の電気炉を動かして、紙袋に入ったままのナイフと鞘、切り刻んだ証拠品をまとめて超高温で溶かした。人の血が付いた刃物は、ほどなくして溶けた鉄の塊になってしまった。これで凶器も物的証拠も消え去った。

個人で鑄造が出来てしまうこんなものがネットの通販で簡単に手に入るのだから、私のような犯罪者にとつても便利な時代になったといえるだろう。一人暮らしの女が持つには不釣り合いな代物をごまかすために、わざわざ鑄鉄とガラスで作った細工をいくつかが作成することになったが、これはこれで楽しいような気もしている。

2時間ほどかけて後始末を終えると、私はプリペイド携帯から、仕事の仲介業者に電話を掛けた。いつも通りの呼び出し音が聞こえ、10回コールが鳴った時点で相手が出た。これもあらかじめ決まっている回数だった。7回以内、あるいは15回以上で出た場合、盗聴されているか、誰かが横にいて頭に銃を突き付けているかしている。その場合は出た瞬間に電話を切って逃げる手はずを整えなくてはいけない。

今回はそのようなことはなかった。

「私。確認終った？」

余計な言葉は抜きにして、さっそく切り出した。

『ああ、確認した。完了だ』

「お金はいつものところに」

『すぐに振り込もう。5分後に確認してくれ。それと次の仕事が入った。3万ドル』

「興味あるわね。サツは？」

私が先ほど腎臓を串刺しにした男は、危ない事業の資金洗浄を任されている会計係の一人だが、立場を利用して仕事の度に小額ずつ自分の懐に入れていた。1回ぐらいなら頭をパンチボール代わりに使われるぐらいで済んだだろうが、1年間もやっていけばさすがに許されない。

それに先日、あの男の雇い主の経営する地下カジノのお売金が強奪される事態があったとかいう話だ。雇い主が神経質になっている状態で悪事が発覚すれば、通常以上にまづい事態になるのはわかり切っている。

仕事の値段は1万5千ドル。それほど大物ではなかったが、チ

ンピラに千ドルで任すわけにもいかない。

とはいっても今回の分だけで1年暮らすには足りないから、今シーズンはもう少し稼いでおくつもりでいた。連続で人を殺せば当局から目を付けられる危険があるので、仕事の度にインターバルを置くことにしている。ただし、その可能性がない限りは、ある程度まとめて稼いでおいても問題ない。

『今までの仕事と関連付けられることはない。距離も離れている』
「他に誰かに声かけた？」

『いや、いろいろと都合が合わない。拳銃使いは6人を消したばかりですぐに仕事をしたがらないだろう。洗濯屋は出られない。釘打ち師や花火屋は太がかりだ。他の連中では使い物にならない』

「それで私ってわけ。一人よね？」

『護衛が2人ほどついている可能性がある。そいつらも消す場合、危険料をプラスする』

「どんな奴ら？」

「ミドル級ボクサーと元陸軍兵士」

「接近にリスクがあるわ。どれくらいなら出せる？」

『1万プラス。予算ではこれが限界だ』

「乗った。情報をお願い」

『分かった。前金も振り込んでおく。健闘を祈る』

私の仕事は殺人だ。

例えばどこかの誰かが、これまた別の誰かに死んでもらいたいと思うとする。そこでまず、そうしたルートに心当たりのある人

物に紹介してもらって、仲介業者に連絡を取る。仲介業者は依頼人の話から情報を集めて整理する。同時に、依頼人の話に裏がないかどうかを確認する。

仲介業者は得た情報を基に、仕事を遂行できそうな業者に連絡を取る。業者は様々な連中がいる。料金が安い者は腕もお察しの通りで、高い金を取る者ほど確実に、素早く仕事を終わらせる。良いサービスには金がかかるのは、どの世界でも共通だ。

手段もそれぞれが異なる。拳銃を使う者もいれば、ショットガンを使って押し入ってから誘拐するのが得意な奴もいる。狙撃、爆弾、あるいはそれ以外。私の場合、得物はナイフを始めとする刃物類一般だ。

依頼主の要望と標的を仕留める難易度を鑑みて、仲介業者は適当な業者に仕事を依頼する。基本的に半額は前払い。終われば残りの入金を確認して、手数料を差し引いた分が業者に支払われる。

依頼人と仲介業者、各業者の連絡網は、全て一回限りのプリペイド携帯や、その他の痕跡が残らない方法で取っている。誰かが警察に捕まっても、芋づる式に全員がお縄になるのを防ぐためだ。私たち業者は依頼人が誰なのかを知らない。仲介業者についても、連絡手段は限定されている。

そのようなわけで、業界の仕事の受注には、幾重にも保険を掛けてある。仮にどこかが挙げられても、その時点で次につながる部分はカットアウトされる。

もしもうっかり情報を漏らせば、業者の方が物理的に口を塞ぎに行く。依頼人が出所なら、面子をつぶされた紹介者から、仲介業者を経由して業者に依頼が入る。業者が出所なら、別の業者が

動員される。仲介業者が出所になれば、彼、あるいは彼女とつながっていた全員が消しに行く。

故に誰かに捕らえられても、命の危険があったり拷問を受けたりしない限りは、仕事のことを話す奴はほほいさない。警察に捕まった場合でも、極端に重い刑を受けないように、過去の仕事につながるネタは残さない。『たまたま一回だけ』殺した場合と、何度も殺している場合とでは、刑の重さは当然ながら変化する。

司法取引を受けてもよいが、その場合はありとあらゆる人間から狙われる覚悟をしておくこと。日本では「人を呪わば穴二つというらしい」。誰かを呪い殺すなら、呪いが返されて自分が死ぬ可能性も考えておくべきという意味だ。

殺しの手段がナイフであっても、墓穴は二つ用意しておくべきだろう。

標的に関する資料は、暗号化されてメールで送られてきた。標的は麻薬のディーラー。元は陸軍士官で、年齢は50代半ば。東アフリカと中東での従軍経験あり。その時点で、上級士官数名、国連職員、NGO構成員、PMCの社員などと共に、大麻やヘロインを国外へ流通させる「ビジネス」を行っていた。内部査察で一斉検挙されかけると裏側の世界に逃げ込んで、そっちで商売を継続した。

最初はチマチマやっていたのでよかったのだが、商売を広げたいと考えたのか、南米からコカインを仕入れて売るようにもなった。奴の地元では扱う物品によって担当する組が分けられている。だが、コカインが新たに入ってくるようになって、そちらを

受け持っていた組は大きな迷惑をこうむるようになった。それでクレームを入れようとしたのだが、『話をつけに行った』チンピラが5〜6人ばかり半死半生の目にあわされ、それを指示した幹部が居所に乗り込まれた挙句に、漏らして命乞いする羽目に陥った。

完全に面子をつぶされたボスは怒り狂ったが、相手はなかなか手ごわい。だからと言って大規模に兵隊を動かせば、警察に目を付けられる。いきなり通り魔にやられたように死んでもらえば、いろいろとややこしい問題はすべて解決する。窓口がなくなれば、すべてが元通りになる。

護衛については、電話で聞いた通りの内容だった。年齢は両方とも30半ば。元陸軍兵は従軍中に海外へと駐留したことはあるが、実戦に参加したことはない。それでも三等軍曹まで昇進しているの、まったくの無能ではないようだ。

ボクサーのほうはベルトこそ持っていないが、それなりにいいところまで行っている。だが、リングでレフェリーが止めたにもかかわらず相手を殴り続けて再起不能にし、ジムを追い出された。両方とも暴力には慣れているようだが、殺人の経験はない。このことは、私には有利に働く。

「仕事部屋」のパソコンでそれらの情報を確認した後は、標的がいると思しき場所の地図や、店舗、住宅事情、交通機関などの情報を頭に叩き込んだ。ことを成す前に、下見に行っておく必要がある。一通りのことを憶えると、同じ部屋のワードローブで着ていくものと道具を選んだ。

着るものは現場に合わせて目立たない物にする。オフィス街な

らスーツ、パーティー会場ならドレス、バーならカジュアル。今回は適当な黒のコートとカジュアルなパンツルックを選んだ。標的を数日間尾行することも考えて、別の装いも用意しておく。同じ人間が周囲をうろろしてれば、警戒心が強い相手なら不審に思ってしまうので、姿は毎回変える必要がある。

代えのコートは先の仕事と同じように、返り血が目立たない暗い色のものを選んだ。動きやすいように、同じく目立たない色のパンツルックを用意する。ウィッグと眼鏡も複数選んだ。靴はスニーカーとパンプス、ハイカットのブーツを準備した。動きやすく、いざというときに走るのに苦労しない。

仕事を実行した際に着ていた服は毎回処分するので、普段着るものとは別口で用意している。買うのも現金での購入だ。今回選んだ服のうち、どれか1セットは袖を通すのが今回限りということになるだろう。

続いて「仕事道具」のナイフ。ワードローブの一角に、ちょっとしたコレクションともいえる数を用意している。サバイバルナイフ、ハンティングナイフ、ダガー、銃剣、トレンチナイフ。包丁やカミソリ、マチェット、カッターナイフ、アイスピック、トマホーク、医療用メス、アイスアックスも用意している。様々な刃の形状、刃渡り。腹を刺すか、喉笛を切り裂くか、あるいは頭をかち割るか。仕事の方法によって選択肢が変わる。

素材も鋼鉄やステンレス以外に、セラミック、黒曜石、骨、木、プラスチックの物まである。金属探知機を鳴らさずに通り抜けたときには、こうした物は頼りになる。

私が女である点も強みになる。体の線が露わなドレスでも、ナ

イフならば隠すことができる。身体検査の際に、胸の谷間や下着の中にカミソリの刃が隠されていると思って、そうした場所に手を突っ込んでくる警備員やボディガードはまずいない。結い上げた髪に差した髪飾りが、実は研ぎ澄まされた先端を持つスティレットになっていることに気付く者もほほいしない。

そして女であることは、標的への近づきやすさを向上させる。時には標的は私を自分の方に引き寄せる。

ナイフの間合いに。

今回の仕事では、ナイフはいつも使っているのと同じスタイルの物を選んだ。戦闘になった時のことを考えて、刃渡りは少し長めの18cm。フルタングのグリップ、高めのヒルト、パーカライズ処理された黒い刃。

念のため、予備に小さめのカラビットナイフも選んだ。元はフィリピンで使われていたスタイルのナイフで、鉤爪のように内側に曲がった刃があり、柄頭には逆手に握った際に人差し指を通すための輪がついている。刃は肉を「引き裂く」ので、刃渡りの小ささからは思いもよらないほど深い傷口を作る。

もう一つの子備として刃渡り12cmのダガーも選んだ。見た目はただの両刃のナイフだが、柄には私が自作した「仕掛け」が施されている。

場合によっては他の種類の刃物のほうが良い場合も出てくるが、その時は現地で購入すればいいだけだ。包丁やカミソリやカッターナイフが売っていないような地域はほとんどない。

必要なものをスーツケースに収めて出発の準備を整えた私は、現場に行くためのチケットと宿の手配を始めた。

依頼を受けてから3日後。私は標的がいる街で、相手を探していた。標的の根城があるとされるエリアのカフェで、オープンテラスの席に座ってカプチーノを飲んでいる。ここは繁華街の中でも人通りが多い場所だ。平日でも多数の人々が周囲を行き来している。

彼氏と離れたって歩く、明るい色のダウンジャケットをまとった若い女。仕立ての良いコートを着た紳士。友達とはしゃぎながら道を行く少年たち。普通の世界の、普通の人々。この中では私は異物だ。だが、中に溶け込む術を知っている。

この周辺に、標的にしている連中の根城があるが、詳細な場所までは依頼主も把握していない。最初に攻撃を受けてから、相手は場所を移している。

普通の人々が平和に生きる世界の象徴ともいえる場所に、コカインを売りさばき、マフィアの手下を半殺しにする連中が巣くっているとは思わない。裏の人間がこの場所に入り込めば、それは花畑の中に突き刺さった鉄柱のように目立つことになる。多数の敵に狙われる少数の人間が隠れるには都合が良い。襲撃を目的として調査したり、集まってきたりする敵の察知が簡単になるからだ。

ただ、彼らを探す側の人間にとっても、標的を見つけるのが簡単になる。私にとってのメリットで、彼らにとってのデメリットだ。

私も彼らと同種の、花畑とは違う世界に住むさびた金属であることを知っているが、表面に花柄を施して花畑の中に溶け込むこ

とができる。

今の格好は暗い色のコートに、えんじ色をしたコーデュロイのズボン、足元はハイカットのウォーキングシューズを合わせている。ウィッグは赤毛をポニーテールにした。アクセサリーの類は目立ってしまいうので身に着けていない。いつも通り、量販店の服それ自体のような人間に装い、普通の人間の中に隠れている。

コートの下にナイフを3本も身に着けて、殺す相手を探しているとは誰も知らない。

標的が人通りの多い雑踏の中に姿を見せることが多いならば、私にとって最も都合がよい。誰かを殺す仕事を請け負っている人間であれば、仕事を実行する現場は人通りの無い場所を選びたがる。銃を使う場合、人目のあるところで取り出せば、それだけで騒ぎになって失敗する確率が高まる。銃声も問題だ。銃口にサプレッサーを装着していても、完全に音が消えるわけではない。

うまい具合に標的を消しても、銃を目撃されたり銃声を聞かれたりすれば、警察への通報と初動は迅速になる。標的に鉛弾を撃ち込む目的は金であり、それを手にしないまま逮捕されては意味がない。銃を使うには、相手がなるべく一人になる場所を選び、そこに到達する必要がある。同業者で有名な――ただし、会ったことは誰もいない――拳銃使い、や、誘拐と拷問が得意な「洗濯屋」はそうやって仕事をする。命を狙われる心配がある者は、彼らを寄せ付けないように、なるべく一人にならないように努めている。

私の場合は彼らとは逆で、標的が一人きりになっている場所がかえって狙いにくい時がある。一人でいるときに、見知らぬ者が

自分の方に近づいてくるのに気が付けば、誰であっても警戒する。

だが、周りに人がたくさんいるのが自然な状況ならば、話は別になる。出勤ラッシュ時の満員電車、人がごった返すイベントの日、年末のショッピングセンター、大音響とフラッシュが状況把握を困難にするクラブのダンスホールは、この上なく都合が良い仕事場になる。それらほど人が密集していなくとも、〃その他大勢の一人〃として、一瞬でも間合いに入ることができれば仕事を十分に終わらせられる。

今までの仕事も、同じような手口で済ませてきたものは多い。

あるときには、出勤して会社に入ろうとする標的とすれ違いざまに、刀身だけにした薄刃のダガーを、肋骨の間に根元まで全部刺し込んで心臓は串刺しにした。ダガーが栓になっているために血はほとんど出ず、刃も体内に埋め込まれてしまっているのので、傍目には心臓発作にしか見えない。そして、周囲が慌てている間に私は立ち去ることができる。

別の時は、空港のごった返すロビーを移動する標的の前を通り過ぎざまに、ハンティングナイフで腹を掻っ捌いた。腹圧で飛び出してこぼれ落ちた腸を目にした標的と周囲の人々は恐慌状態に陥る。その間に私は姿を消している。

いずれの場合でも、ナイフを握った手の動きは、周囲の人々や私の体自体が壁になって、誰の目にもとまることはない。そしてナイフは音がしない。内臓を突き刺しても、腹を切り裂いたとしても、周囲に聞こえるような音はほとんど立たない。

このやり方は、私以外の業者では出来ない。それゆえに重宝されている。他ではまねできない技術やサービスを提供できる業者

は、どんな分野でも人気があるのだ。

標的が電車に乗ったり、徒歩で移動したりするのが多いような都合がいい。そう思いながらカフェのテラスから、標的か護衛の姿を探していると、人ごみの中にその姿が見えた。

標的の部下の片割れ。元陸軍兵士だ。面長で痩せており、身長は190cmほど。黒い髪をクルーカットにしている。明らかに周囲から浮いているのが分かる。背が高いことが理由ではない。花畑の中に紛れ込んだ、さびた金属のように、雰囲気は周囲の人々とは異なっている。

私はカプチーノの残りを飲み干して、席から立ちあがった。距離を開けて、人ごみの中をどこかへ向かって歩く元兵士を追跡する。標的のところへ向かうなら一番手っ取り早いのが、住処や生活パターンがわかるならそれでも良い。見張っていれば、いずれ本命のところへと案内してくれるからだ。いつまでも相手が現れないなら、その時はこいつの腹を掻っ捌いておびき出すだけだ。

しばらくついていったが、そいつはどんどん人気がない方へと向かっていった。さて、これはまずいことになった。このままでは尾行がばれる。あきらめるか、それとも人気がないのを利用して、あいつを殺るか。

その時、私は自分が見られていることに気が付いた。そんな気配がする。

しばらく歩いていると、元兵士が携帯を出して誰かと話し始めた。一瞬だが、その方に緊張が走ったのがわかった。すぐに元の足取りに戻ったが、警戒心がにじみ出ている。

つまりは、そういうことだ。

リスクはあるが、手っ取り早く済ませることが出来る。

私は何も気づいていない様子で、同じように元兵士の後を追った。やがて相手は裏通りに入り、アパートとアパートの間の狭い路地へと姿を消した。

私は見失っては大変といわんばかりの様子で、後を追って走り出した。いきなり角を曲がって姿が見えないようにするのは、尾行者の有無を確かめる際のオーソドックスな手順だ。素人なら焦って走りだしたり、足を急がせたりする。私もそのようにした。角を曲がって裏道に入り込むと、4 mほど先で元兵士がこちらを向いて立っていた。その横には、探し求めている標的の姿があった。写真通りの見た目だ。元兵士ほどではないが背が高く、体格は大きい。茶色がかかったブロンドの髪と髭。いかにも冷酷で、人を見下すような雰囲気を持っている。

「へい、姉ちゃん。俺になんか用か？」

元兵士の方が口を開いた。私はまずいところに行き当たってしまった若い女がそうするように、身をひるがえしてその場から逃げるそぶりを見せた。

通りの方を向いた私の目前に、もう一人の男が立ちふさがった。標的の護衛のもう一方、ミドル級ボクサーの方だった。背はそれほど高くないが、肩幅が広く、発達した胸筋がセーターの胸を盛り上げている。尾行中に感じた視線の持ち主で、元兵士が電話していた相手はこいつだ。二重尾行と隘路での挟み撃ち。

そいつが右こぶしを体の前に掲げると、金属の輪が指を覆っているのが見えた。ブラスナックルを握りこんでいる。

そいつが足を踏み出すのを見て、私は演技を続けるべく後退り、

標的と元兵士の方を見てから、前後をふさぐ連中のちょうど真ん中あたりまで移動した。

壁——古ぼけたアパートの外壁——に背中をつけて、不安げな表情を演出して左右をあわただしく見回す。追い詰められた弱者の振り。

私の逃げ道をふさいだ3人の男は、3 mほどの距離を開けてこちらの正体を目で探っている。下手に近づいてこないのは、こちらが何か武器を取り出した場合への警戒だ。おそらく、元兵士と標的は拳銃を隠し持っているだろう。

「さっき俺の友達——そこにいるマッチョが、後ろから可愛いお姉さんがずつとつけてきてるって教えてくれたのさ。一目惚れってわけでもねえよな？ 残念ながら」

「……」

「さて、教えてくれねえかな。なんで俺をつけた？ 女の腕をへし折ったり、指を潰したりするのはやりたくないんだ。素直に話してくれよ」

「……あんたがどこに行くか調べたら、お金をくれるって人がいたの」

「そいつは誰だ？」

標的が初めて口を開いた。でかいブルドッグが唸るような声をしている。

「知らない人。広場のカフェで声をかけられたの」

「それで誘いに乗ったのか？」

「最初に500ドルもいきなりくれたの……。写真も撮ってきたらもっとくれるって」

私のホラ話を聞いて、元兵士の方は小ばかにした笑いを浮かべた。

「知らない人の話に乗っかっちゃいけないって、ママから教わらなかったのかい？　ちゃんと守らねえから、こんなことに巻き込まれんのさ」

対照的に標的の方は眉一つ動かすことなくこちらを見ている。一瞬、こちらの正体がばれたのではないかと恐れたが、幸いにもそうではなかったらしい。

「何持っているか調べろ。携帯、ID。全部取り上げろ」

「了解」

元兵士が近づいてきて、私の腕をつかんできた。

「ちょっと、やめてよ！」

「黙れ、くそアマ」

私が兵士の手を振りほどくと、裏張り手が私の顔に叩き込まれた。スナップの利いた一発で、目の前に星が飛んだ。

軽く吹っ飛ばされたように見せながら、私は地面に倒れこんだ。頬の内側が切れて、舌に血の味が広がる。

私は呻いて身じろぎし、倒れる際に体の下になるように調整した右手で、左わきの下に収めたダガーの柄を握った。

「ひっぱり起こせ。まだ何か言うなら、腹に一発ぶち込め。ブラスナックルの方の手でな」

「ああ」

標的の指示に従って、ボクサーの方が近づいてくる気配がした。足音が頭の近くまで近づいて、コートの襟首が掴まれるや否や、ものすごい力で上に引き起こされる。

体が引き起こされたとき、私は地面に延びていた足を前に伸ばして踏ん張り、ナイフを引き抜いてバックハンドで振った。

ダガーの刃が、私のコートの襟をつかんだボクサーの左腕の内側を、斜めにバッサリと切り裂いた。動脈とともに筋肉が切断され、襟をつかんでいた手から力が失われる。

立ち上がりながらダガーをフォアハンドで振り、返す刀で腋の下の動脈も切り裂く。ボクサーが呻いて腕をひっこめた。

傷は浅いので、失血死するにはまだ時間がかかる。だが、奴の戦闘能力を削いで、隙を作り出すには十分だ。

私は低い姿勢のまま振り向き、元兵士の方へと踏み込んだ。同時に、パンツの左ポケットからカランビットナイフを逆手に握って取り出す。元兵士の方はジャケットの内側に手を入れた状態だった。拳銃を取り出そうとしている。

私は相手の右肘めがけてダガーを突き出した。刃先が肘の外側——ぶつけると腕がしびれるあの場所——に刺さって尺骨神経を傷つけ、右腕の機能を破壊する。

腕に走る強烈な刺激に、元兵士が叫んで前かがみになった。私はダガーを引き抜きながら体を右に旋回させ、左手のカランビットで元兵士の上腕を切りつけた。鉤爪型の刃が僧帽筋を引き裂き、右腕全体が上がらなくなる。これで銃を取り出すことはできない。

カランビットを振った勢いで、ボクサーの方に向き直る。左腕の負傷から予想以上に早く回復していたボクサーは、ブラスナックルを嵌めた右拳で強烈なストレートを放ってきた。

レンガも粉碎できそうな一発をかがんで避け、空手の払いの要

領で、カランビットで右腕の内側を下から上に切り裂く。手首の動脈と腱を断ち切り、低い姿勢のまま少し踏み込んで、ダガーを右の内股に突き刺した。太ももの奥深くにある深部大腿動脈を切断し、刃を捻じって傷口を広げ、一氣に引き抜く。

人体で総頸動脈に続いて太い動脈から、ホースでぶちまけるように血が噴き出した。左右の腕の動脈切断と合わせて、十数秒で意識が失われる。

すでに死んだも同然のボクサーを放置し、私は元兵士の方へと突進した。ひじの痛みから立ち直ろうとしている相手の懷に飛び込み、カランビットをアッパーのように振るって、腹と胸の境目に刃をねじ込む。湾曲した刃を一番下の肋骨に引っ掛けて引き上げた。枝肉にミートフックを刺して動かす時のように私は元兵士の体を盾にして、標的から身を隠した。

銃声が響き、つい先ほどまで私の足があった場所を貫いて弾丸が地面をえぐった。銃声からして、標的の拳銃は、45口径のようだ。威力は大きいが貫通力は低い。標的が部下をハチの巣にするのをいとわない性格でも、この「盾」十分防ぐことができる。

突き刺したカランビットを取っ手のように引っ張り、元兵士の体を肉の盾として扱いつつ、ダガーで腹の右側あたりを3回刺して捻じった。張り手の仕返しとしてはおつりが出るほどのナイフを食らわせ、肝臓をズダズダにしてやる。1回刺しただけでも大量の出血に見舞われ、1分で意識が失われる場所だ。

こいつが死ぬのが確定したとき、さらに銃声が鳴って、元兵士の体が震えた。標的が私の「盾」に弾を撃ち込んでいる。身内だからと言って躊躇する人間ではなかったらしい。容赦なく弾丸が

撃ち込まれてくるが、鉛玉は元兵士の体を貫いてくることはない。死ぬのが1分後から今に変わった元兵士の体から力が抜ける。私の腕力ではその重さは支えきれない。私は踏み込んで、死にゆく男の体を肩で支えるようにしながら、ダガーを引き抜いて前に向けた。ちょうど、銃撃戦の際に遮蔽物の陰から銃を突き出すのと同じように。

死体の脇腹から片目だけのぞかせ、前に向けたダガーの刀身と、拳銃をこちらに向けている標的の姿が重なったとき、私はダガーの鏢を親指で横にずらした。金属音とともに、ダガーの刀身が猛烈な勢いで射出された。

柄の中に強力なスプリングが入っており、鏢の部分をずらすとロックが解除され、刀身が茎ごと飛び出す。私の全体重をかけないと縮められないほど強いスプリングの力が、200gにも満たない刀身に込められて撃ち出される。ナイフを投げるよりも少ない動作で、はるかに正確に10m先でも人間の頭蓋骨を貫くことさえできる。

胴体のどこかに当たれば、12cmの刃が根元までめり込むことになる。刺さって死ねばそれでよし、即死しなくても、弱ったところでとどめを刺してやればいい。

放たれた刃が肉に突き刺さるのを期待したが、標的が体の前で銃を持った手を横に振りはらうと、金属同士がぶつかる音が聞こえた。標的の手から銃が弾き飛ばされ、銃のフレームに刃が突き刺さっているのが見えた。

驚いたことに、矢と同等以上の速度で飛んでくるナイフを拳銃で受け止めたらしい。年に見合わない、驚くべき反応速度と動体

視力だ。

だが、これで標的の武器はなくなった。私は元兵士の死体を放り出し、標的へと突進した。柄だけになったダガーを捨て、ベルトの後ろにつけていた鞘からナイフを引き抜く。

人間は本能的に手を出して体をかばう。ナイフを相手にした格闘術でも、ナイフを持つている手を押さえるために腕を出す。だから、まずは指を切り飛ばす。ひるんだところで目を切りつけ、続いて太ももの側面の神経が集まる部分を刺す。それから足を払って倒し、腎臓を刺した後に喉を搔っ捌く。

余計な抵抗をされる前に速攻で殺す。躍りかかろうとしたとき、標的の手が腰の後ろに回された。ちょうど私が先ほどしたのと同じように。

制動をかけた瞬間、抜き出された標的の腕がヘビのようにしななって繰り出されてきた。銀色の光を伴って、私の顔があったはずの位置を通過する。

私は軽くステップして距離を取った。標的はナイフを手にしていて。これは予想外だ。

標的が手にしているのは槍の穂先のような形状の刃をしたダガー。中ほどの部分が鋸刃になっている。見たところでは、刃渡りは16.5cm。

柄を握る手のスタイルは、親指をヒルトに添えたサーベルグリップ。刃先もふらつかずに、見事に定まっている。右手の指の腹には胼胝が出来ていることだろう。

つまりは私の同類だ。

仲介業者がよこした資料には、そんなことは書いていなかった。

情報を受け取っている顧客としては、後でクレームを入れてやるべきだろう。

こいつに殺されずに仕事を成し遂げられれば、の話だが。

標的と私は、ダガーの刃先を相手に向けながら向かい合っている。ナイフを使う相手と、正面から立ち会うのは久しぶりだ。アドレナリンが分泌され始めたことで、ウィッグの下で髪の毛が逆立ち、瞳孔が開いて世界が明るくなるのが分かった。血流の量が増して、耳の中で鼓動の音が響く。

始まりは唐突だった。標的の体がふと沈むと、地面からガラガラヘビがとびかかるようにダガーが突き出された。脇腹を狙ってきたダガーを持つ右腕を、私は左手で外に払った。カランビットで手首をざっくりと切り裂いてやるつもりだったが、刃が触れるよりも早く、標的の腕は引き戻されていた。

私は踏み込みながら、右手のナイフを標的の顔へと振るったが、引き戻された標的のダガーが、またもヘビのスピードでもって突き出されてきた。

踏み込みをやめてスウェーバックしたところを、標的は距離を詰めてくる。動きにスキがない。

まっすぐ来るかと思われた標的は、私の左側へとステップし、肩めがけてジャブのようにダガーを振ってきた。僧帽筋を切断して腕を動かなくする狙いだ。

体を開いてかわしたが、コートの表面を刃が切り裂いたのが分かった。体を開いた動きで右足から踏み込み、目を切りつけるが、左腕で手首を受け止められてブロックされた。

腕をつかんで来ようとしてきたので、とっさに振り払いながら、

右足で相手の脇腹を蹴り上げた、ブーツ越しに、相手の肋骨がきしむ感触が伝わってくる。標的の動きが止まったタイミングで、カランビットをふるって今度こそ目を切りつける。標的がダガーを引き戻して受け止めると、内反りの刃と鋸刃がぶつかって不快な音を奏でた。

腹にナイフをねじ込んでやろうとしたが、それよりも早く相手の左拳が私の顔めがけて繰り出されてきた。とっさに顔をのけぞらせたが、間髪入れずに出された前蹴りが腹にぶつかってきた。

息を吐いて腹筋を締めたが、丸太でもぶつかってきたかのような衝撃が炸裂して、私の体は後ろにふっ飛ばされた。何とか後頭部を守って受け身を取り、飛ばされた勢いを利用して後転して、何とか足を地面につけた状態に戻った。

そのまま近づいてこようとしてきた標的をけん制するため、ナイフを構えて前に突き出す。再びにらみ合う状態になったが、やはり私の方が不利だ。フィジカルの面では勝てないのはわかり切っている。とはいっても、負けるつもりはさらさらない。

ナイフの柄頭につけたストラップを手に通し、一周巻いて柄とともに握りこんだ。これで握りが緩んでも落とさない。

足を地面に滑らせるようにステップして右に回りながら、相手との間合いを詰めた。標的は完璧な中段の構えを取り、私に刃先をぴたりと合わせて迎え撃つ姿勢でいる。

フェイントで右に回るこむように見せかけて、左に低く踏み込んで下から腕を狙う。ダガーが引かれ、槍並みの間合いと鋭さで突き出されてきた。何とか間合いを外すが、槍が鞭へと変わって、こちらの顔めがけて振るわれる。

やはり相手の間合いの方が長い。突き出されるナイフを持つ手を狙おうとしても、かわされて刃が振るわれる。喉元を狙ってきたときに、手をめがけてカランビットで切り付けたが、相手は既にナイフを戻そうとしていた。そのタイミングを狙い、私は左手のグリップを緩めた。人差し指にかけていた柄頭のリングを中心に、ガンマンが銃をスピンさせる時と同じようにナイフを回転させる。

柄の分だけ間合いが伸び、鉤爪の先端が手の小指側を切り裂いた。標的が反射的に手を引っ込めようとしたところで、私は左足を振り上げて、つま先で標的の手首を下側から蹴り上げた。

標的の手からダガーが飛んだ。それが地面に落ちる前に踏み込んで、右手のナイフを脇腹めがけて突き出したが、左腕で払われた。その代償として、標的の上腕がざっくり切り裂かれた。

状況は私に有利に働いている。このまま少しずつ切り付けていけば、いずれ無防備な胴体に刃をねじ込むことになる。

返す刀でもう一度切りつけようとしたが、左手で上に払われた。こちらの胴ががら空きになる。左手で防ごうとしたが、素早く繰り出されたジャブが肋骨に突き刺さった。

骨に響く痛みに動きが止まった瞬間、標的はこちらの腕を握り、捻じってわき固めの形で極めてきた。斜め後ろに腕を伸ばされて締めあげられ、カランビットで切り付けることもできない。骨がきしみ、靱帯が引き延ばされる痛みが伝わってくる。

ナイフを握る右拳に強い衝撃と痛みが走った。ナイフを奪おうと、標的が手を殴ってきている。このままでは肘が逆に曲がる。ナイフまで奪われれば優位が消える。

私はナイフを取り落とさないように柄を握りこみながら、両足に力を入れた。一気に地面を蹴り、固められている右腕を中心に、前方宙返りの形で回転する。私の全体重を使った力で振りほどかれた形になり、標的が私の腕を放した。

着地しながら身を沈め、相手の膝の裏を蹴る。バランスを崩して前のめりになったところに、サッカーボールのように腹を蹴りつけてやる。

みぞおちにまともに靴先がめり込んだように見えたが、標的は一気に身を起こしてつかみかかってきた。予想以上に素早い動きで、両手首をそれぞれ掴まれる。

暴漢がこうやって襲ってきたときの一般的な対抗策として、股の間めがけて膝を振り上げてやる。しかし、膝が標的のタマを叩き潰すよりも早く、相手が頭を思いきり前に振ってきた。額がまともに私の鼻柱を捉え、軟骨がへしゃげる音と共に、目の前でフラッシュがたかれたかのような衝撃が弾ける。意識が吹っ飛びそうになるのをこらえ、2発目に備えてあごを引いた。左手をおさえていた手が離れるのを感じたが、逆手で切り付けるには距離が近すぎる。こちらから頭突きを見舞ってやろうとしたとき、あごに物が突き刺さるような鋭い衝撃が走り、視界がぐんと上を向いた。

視線だけかろうじて前に維持すると、降り上げられた標的の肘が見えた。こちらのあご先がけて、肘を上向きに振ったらしい。目の前を星が飛び、視界がぼやけて判断能力が失われかけるのが分かった。腕が私の後頭部へと伸ばされ、ポニーテールにしている後ろ髪を掴んだのが分かった。

次はどう来るか。ひねって首をへし折る、喉を叩いて気管を潰す。いずれにしても致命的だ。

だが、どれもうまくいかないのを私は知っていた。

標的が私の髪を思いきり引つ張ると、髪が抜けた。ポニーテールの根元ではなく、髪全体が頭から外れたのだ。

今の私の髪は変装用のウィッグだった。

予想していなかった手ごたえの軽さに、標的の動きが一瞬だけ止まり、バランスが崩れたのが分かった。

即座に足を上げ、踵で標的の足の小指を思いきり踏みつける。相手が痛みに息を詰まらせたところに、少しだけ後退してスペースを確保し、左手を振って顔のあたりを切りつけた。

カランビットの鉤爪が標的の右目の下に突き刺さり、瞼を通って額までまでを一気に引き裂いた。目を縦断する傷から一気に血があふれ出し、標的が獣のような声で吠えた。顔をのけぞらせてよろけた拍子に、私の右腕を掴んでいた手が離れる。

私は即座に身をかがめ、ナイフを標的の左太もも側面——足を動かす神経が走っている場所——に直角に突き立てる。足に走った強烈な刺激に、標的が再び獣のように吠えた。

瞬時に標的の左下肢から力が抜ける。私はナイフを引き抜きながら、バランスを崩して前のめりに倒れる標的とすれ違うように、その背後へと回った。

地面に手をついて支えようとしたところを、私は体重をかけて体ごとぶつかりながら、ナイフを標的の右腰に突き刺した。腎臓に黒い刃がめり込み、無数の血管を切断する手ごたえがあった。標的の体が、死に至る痛みに反応してエビ反りになる。放って

おけば死ぬが、こいつに限っては確実に殺す必要がある。

ナイフを捻じって引き抜きつつ、左手を相手のあご下に回してカランビットをあごの下に突き刺す。骨に引っ掛け、釣り針のように引き上げて喉をあらわにした。同時に標的の首に右手を回し、左あごの角の真下に、刃を直角に深々と突き刺した。

刃を右へ、逆側のあごの角へと引き、2本の総頸動脈と気管をまとめて切り裂く。標的の喉は耳まで裂けた口（グラスゴースマイル）のような有様になって、脳に向かうはずの大量の血液を一気に流れ出した。

標的が喉に手をやったが、あふれ出る血を押しとどめることはできない。気管に入った血と最後の吐息が混ざり合い、あぶくが立つ音が聞こえる。

カランビットとナイフを引き抜き、標的の後頭部を押して顔面を地面にたたきつけた後、私は立ち上がって後退した。標的の喉と右腰からあふれた血が作る血だまりが、急速に広がっていく。喉からは飲み物にストローで息を吹き込むのに似た音が出ていたが、ほどなく静かになった。

ようやく仕事が終わった。標的は喉を掻っ捌かれ、護衛もあの世行きになった。大立ち回りになってしまったのは予定外だったが、少なくとも依頼された内容は達成できた。

それを認識すると、体から力が抜けそうになってくるのを感じた。強烈な疲労感がスポンジに水が染み込むときのように、体中に浸透してくる。殺し合っていた時に湧き出していたアドレナリンが引いていくせいで、それまで感じなかった痛みが体中で声を上げ始めた。

あまりに疲れたせいで、これから後始末をして逃げる気にもなれず、壁を背にしてへたり込み、しばし休むことにした。使ったのはナイフだけだし、この場所は人氣が無い。標的たちがここで私を待ち伏せしていたのは、少々誰かが泣きわめこうが聞こえないのを知っていたからだ。向こうは私が喚くことを見越していたが、こっちはそれを利用してもらった形だ。

顔はビンタを食らい、鼻に頭突き、あごには肘をぶち込まれた。見るも無残な顔になっていることは間違いない。

前蹴りを食らった腹にもあざが出来ているだろう。腹筋を締めなければ、胃の中身を全部ぶちまけるところだった。

腕の関節を極められた際に殴られた右手もひどく痛む。骨にヒビぐらいは入っているかもしれない。ストラップを巻き付けていなければ、間違いなくナイフを取り落としていただろう。

仕事中にケガを負った経験はあったが、ここまでひどくボコられたのは初めてだ。それもこれも、仲介業者の情報で肝心なところが抜けていたのが原因だ。こちらがナイフを使うのは一番よく知っているのだから、標的も同じ得物を使うことぐらい知らせてしかるべきだろう。このことにはきっちりとクレームをつける必要がある。

口の中に異物感を覚えて手に吐き出すと、血の混じった唾液と共に白いかけらが出てきた。ひじを食らった時に歯がかけたようだ。仲介業者には歯医者代も請求してやる。

さすがにいつまでもへたり込んではいられないので、いい加減立ち上がることにした。自分が殺した死体が三つも転がっている場所で、のんびりゆっくりしているわけにはいかない。

今の有様では表通りに出てホテルに戻ることはできない。両手は血まみれだし、顔には青あざが出来ている上に返り血が跳ねているだろう。コートと手袋は黒色のものを選んでいたので目立たないだろうが、ある程度はふき取っておかないと、道行く人に不自然に思われるかもしれない。

何よりも問題は顔だ。散々に殴られましたと書いてあるような顔をしている女は、いやでも目立ってしまう。表通りに入る前に、どこかで顔を洗って、ある程度のメイクをしてごまかすことができればいいのだが……。

そう思ってナイフをしまおうとしたところで、地面に転がっている銃と、突き刺さったダガーを見つけた。すっかり忘れていたが、あれの刃と柄も回収しなくてはいけない。残す痕跡は少ないほうがいい。

そちらに足に向けたとき、路地の入口であわただしい足音が聞こえ、一人の男が現れた。ブルーを基調とした制服に官帽。『警察官』の名刺代わりになっているその姿を見た瞬間、私はナイフから手を放した。

こっちは顔を殴られた女一人。死体は男3人。武器さえ手にしていなければ、誰がどう見ても被害者だ。警官が油断したところを叩きのめし、さっさと逃げればいい。

しかし、ストラップを手に通していたのが仇になって、スムーズに落ちずに手に引っかかってぶら下がった。カランビットの方は言わずもがな、指を通したリングで簡単には手を離れてくれなかった。

転がる死体と殴られて血まみれの女。状況を把握しかねていた

警察官の目が、私の手からぶら下がるナイフにとまった。その結果、彼の脳の中で、私という人間が被害者ではなく怪しい人物にカテゴライズされてしまった。

少しもたつきながら腰のホルスターに手を伸ばして拳銃を引き抜いた。

「動くな！ ナイフを捨てて手を上げろ」

1 m以内であれば拳銃相手でも勝てる自信があったが、そうするには少々距離が離れすぎていた。私はおとなしく従い、手を振ってナイフを地面に落としたり。

「地面に伏せろ！」

警官が叫ぶ。声が上がっている様子からして、こうした場あまり慣れていないらしい。こういう輩が銃を構えていると、緊張しすぎてちょっとしたことで暴発させかねない。鳴れている人間に狙われているよりもかえって危険だ。

この警官は、これから手銃をかけに近づいてくる。銃を抜くときのもたつき具合からして、それほど機敏な方ではないのはつきりしている。いいタイミングで姿勢を崩してやってぶちのめし……。

ところが、路地の入口の方で人の気配がして、警官が追加で3人ばかりやってきた。それで、警官を叩きのめして逃げるという選択肢は儂くも消え去った。

さてなんでこいつらはこんなに早くやってきたのかと知っている、ナイフが刺さった拳銃が目に入った。

そこでようやく思い出した。確かに「私は」ナイフしか使っていないが、標的は拳銃を持っていた。護衛の元軍人の肝臓をミン

チにしてやった時に、標的の方は部下がハチの巣になるのも構わず撃ちまくっていた。

どれだけ静かでも、銃声が何発も聞こえれば、どっかの誰か通報するのは当たり前だ。直後に斬り合いドつき合いになったせいで、完全にすっぽ抜けていたのだ。

用心しいしい警官が横に来て、私の手をねじ上げて手錠をかける。引き立てられながら、さて、これからどういう風に言い訳しようかと考えていた。仲介業者にクレームを言うどころか、下手に情報を漏らせば「後始末」に同業者が送り込まれてくるかもしれないので、うまくやる必要がある。

仕事が終わった後は、余計なことをしないでさっさと帰るべきだ。残業は良くない。

喫茶店文芸 2021年3月号

監修 マサユキ・マサオ

編集 氷川省吾

